

2024年4月28日

復活節第5主日

菊地功大司教 メッセージ

日本の司教団は先日、アドリミナの訪問のために、全員でローマに出かけてきました。定期的にローマを訪れ、教皇様を始め聖座に、それぞれの教会についての定期的な報告をすることや、聖座の省庁から指導を受けることもあります。もう一つ大事なことは、使徒の後継者として、聖ペトロと聖パウロの墓前でミサを捧げ、司教としての務めを果たすことを改めて心に誓うことがあります。

司教にとってそれは、自分たちがどこにつながっているのかを確認することであり、また同時に司教たちを通じて、それぞれの地方教会が、どこにつながっているのかを再確認することでもあります。イスラエルなどの聖地巡礼は、私たちの信仰の原点を思い起こさせますが、アドリミナでのローマ訪問は、教会が普遍教会として世界に広がり、また同時に一つにつながっていることを思い起こさせます。

私たちは、ローマの司教であり聖ペトロの後継者である教皇様につながることで、主イエスによって呼び集められた弟子たちにつながり、今もまた聖霊によって導かれている教会共同体の一員であることを、再確認します。

使徒言行録は、回心したパウロが、当初は彼を迫害の手先として恐れていた弟子たちから受け入れられ、その出来事を通じて教会が、「平和を保ち、主を畏れ、聖霊の慰めを受け、基礎が固まって発展し、信者の数が増えて」言った様子を記しています。

神の救いの計画は、人知をはるかに超えた方法を取りながら、成就する道をたどることを、あらためてわたしたちに認識させます。教会は、その始まりから、聖霊に導かれ、人間の知恵を遙かに超える道を歩み続けてきました。教会は、聖霊によって導かれています。

ヨハネ福音は、主ご自身が、「ぶどうの枝が、木につながっていなければ、自分では実を

結ぶことができないように、あなたがたも、わたしにつながっていなければ、実を結ぶことができない」と指摘された話を記しています。

ぶどうの木である主イエスにつながっている限り、枝である私たちは「豊かに実を結ぶ」ことが可能となります。私たちはぶどうの木の枝として、世界に広がりつながっている教会です。

しかし同時に、その豊かな実の中身がどのような実りであるのかは、枝が自由に決めることはできません。すなわち、わたしたちが幹である主イエスに枝としてつながっているのであれば、それは私たちが好ましいと考える実りを生み出すためではなくて、主ご自身が望まれる実りを、主の思いのままに実らせることでもあります。聖霊の導きのままに、実りを生み出すことです。

豊かな実りは、主の実りであって、わたしたちの実りではありません。仮に、自分の理想の実現を実りだと考えるのであれば、それは教会に働く聖霊の導きを否定することにつながります。教会が今歩んでいるシノドスの道こそは、わたしたちが一つの幹に連なっている枝であり続けることを、明確に思い起こさせています。わたしたちは、自分の実りではなく、主の実りを生み出す枝でありたいと思います。